

日本人の世界遺産神話と アメリカの環境保護

山本玲子

5月10日、ビッグニュースが飛び込んできた。「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島(奄美・沖縄)」が世界自然遺産に登録される見通しとなった。いまごろかと感じると同時に、正直残念にも思った。

自然区分の世界遺産としては、屋久島、白神山、知床、小笠原諸島につき日本で5件目。絶滅危惧種のイリオモテヤマネコやアマミノクロウサギ、ヤンバルクイナといった希少性の高い固有種や動植物の多様性が認められての登録見通しとなった。

残念に思ったのは、日本人の環境保護に対する意識の低さである。特に「世界遺産」の冠がついた瞬間、日本では自然破壊が始まる。観光客が大挙して押し寄せ、道路や施設などの開発が始まる。本来あるべき姿がなし崩し的に破壊されていくのが日本の現状である。

アメリカの国立公園制度

見習うべき環境先進国がアメリカだ。アメリカは1872年、世界に先駆けて「国立公園制度」を取り入れた国である。アメリカの国立公園のすばらしさは、自然をかがえのないものとして尊重し、徹底して保護に努める姿勢にある。Keep Wildlife(野生生物は野生のままに)。人間からの影響を極力抑えるよう、保護が徹底して貫かれている。

国立公園内で歩いて良いのは歩道など定められたエリアに限られる。仮にエリアを外れた所に1歩でも入れば、そこに息づく植物が踏み荒らされ、植物を餌とする動物が死に、やがて絶滅する。無意識の自然破壊が食物連鎖を壊し、最終的には地球全体の危機につながることを来園者は承知している。死滅せずとも、元の状態に戻るまで何

千年、何万年もかかることを知っているのだ。

見晴らしのいい崖にも、手すりは最小限しかない。実際に滑落する事故も発生する。例えば、グランドキャニオン谷底へのトレイルにはほとんど日陰がない。十分な水分を持たず、自分の体力を考慮しなければ、命を落とすことすらある。

園内では宿泊施設も最低限に留められている。動植物のため夜も明かりを抑えている。客室にテレビや電話はなく、かろうじてロビーでワイファイが使えるのみ。夜は満天の星空と虫の音を聞きながら眠りにつき、朝は鳥たちのさえずりで目覚めてもらうための配慮である。宿泊施設の外観も周囲の景観に溶け込んでいる。

実は、アメリカで「世界遺産」の知名度はあまり高くない。世界最高水準の国立公園制度がしっかりと機能しているだけに、「世界遺産」の冠がここ

うがつくまいが、世界に誇る国立公園のすばらしさになら変わりはしないのである。

山火事も消さない

筆者が初めてアメリカの国立公園を訪れたのが1989年、初の国立公園に指定されたイエローストーンであった。園内をバスで走っていた際、衝撃的な光景に出くわした。真っ黒な樹木の焼け焦げた跡がどこまでも続いていたのだ。聞くと、前年の山火事で燃えた跡だという。さらに驚いたのは、山火事の発生理由とその後の対処についてだ。1988年の夏は園内のあちこちで落雷が発生し、乾燥した樹木が燃えて大火災が発生した。これらの火災を国立公園局は放置したのである。火災は消すものと思っていた筆者には衝撃的だった。

自然発火の火災は3カ月ほどで鎮火した。再度窓ガラス越しに焼け跡を見

ると、真つ黒に燃えた木々の間から青い芽がすくすくと育っていた。これが自然の摂理なのである。まさに目からうろこであった。

アメリカの失敗

アメリカ人が自然保護の意識を持つまでには数々の失敗があった。国立公園法ができあがったものの、保護に予算をかけるにも時間がかかり、その間、園内の鉱石や植物を持ち帰る者もあとを絶たなかった。クマやリスなどの野生動物への餌やりも当然のこととして行われていた。

ところで、人間から餌をもらうことを覚えてしまった野生動物の末路を考えたことがあるだろうか。餌付けされた野生動物は、やがて自分で食料の探し方、獲物の捕らえ方を忘れてしまふ。観光シーズンが終わわり、寒い季節に食料が見つけられなければ飢えて死ぬ。動物によっては人間を襲い、食料を奪うようになることもある。動物にとっても人間にとっても悲しい結末が待っているのだ。

バッファロー絶滅の危機

アメリカバイソン（＝アメリカカ



一時は絶滅の危機に瀕したバッファロー

ギユウ、バッファローとも呼ぶ)の悲劇も教訓となった。白人入植前北米大陸にバイソンは30000、6000万頭も生息していた。バイソンの皮革が売買の対象となり、白人による乱獲が始まった。特に激化したのが1860年代の鉄道敷設の頃。2年間に渡り毎日5000頭ものバイソンが殺されていった。

実は皮革以外にも目的があった。北西部に住むネイティブアメリカンにとってバイソンは重要な食料であり、皮革や骨などの部位は生きるための道具であった。バイソンのすべてを自然の恵みとして生活を営んでいたのである。しかしながら、当時の政府にとってネイティブアメリカンは好ましくない存在であった。彼らの食料源であるバイソンを断つ政策に打って出たのである。

バイソンを失ったネイティブアメリカンは飢えるようになり、政府に従わざるを得ない状況にまで追い込まれた。

た。1890年代にはバイソンの数は1000頭を割ってしまう。

アメリカの現在

環境先進国アメリカでも、環境破壊は進んでいる。人気の国立公園では現在、園内のポイントで電気自動車のシャトルで巡るなど、排ガスの影響を極力減らす努力をしている。

市民レベルの自然保護も目覚ましい。渡り鳥の妨げとならないよう、大都市ではビルの一斉消灯を実施。また、フロリダ州大西洋岸沿いの住宅では、ウミガメの産卵のため、夜間海側の窓はすべてカーテンで覆い、明かりが漏れないよう配慮している。水族館では、ビニールを餌のクラゲと思ったカメが誤飲して死亡してしまう実状を解説するなど、啓蒙活動も日常的に行われている。

く人々に伝えようと活動を開始。当時の大統領T・ルーズベルトの心を動かして、国立公園制度の成立にこぎつけた。前述のバイソンも保護活動のおかげで現在18万頭までに増加した。

日々の生活の中でできる環境保護

ロッキーマウンテン国立公園を訪れた際、アメリカ人ガイドに言われたことがある。「日本人が公園の花を摘んでしまったんだ」と。国立公園制度についての無知もあるが、自然を保護することがいかに重要か、自分たちの生活に関わっているかが、残念ながら日本では市民レベルで理解されていない。

Keep Wildlife Wild (野生生物は野生のままに)。日々の生活の中でもこの言葉の意味が見えるはず。雑草や野の花も生態系の一部。花が咲けば、蜜を求めてチョウやハチが集う。ハチミツは人間が食べることもある。人間が自然のサークルの中に含まれていることが実感できる。

貴重な自然を保護し、後世に受け継ぐことが、「世界自然遺産」の本質である。商業化することだけは避けなければならない。